

ほほえみ 第109号



今年もあっという間に師走となりました。最近、ニュースレターを出すのも遅れ気味ですが、実は先週末、研究助成をいただいていたファイザーヘルスリサーチ振興財団のヘルスリサーチフォーラムでの発表があり、かなり直前まで準備したので、ニュースレターを書く余裕がなくなっていました。ようやく、少し落ち着いて書き始めています。皆様も、師走を忙しく過ごされていることかと思えます。今、頑張っ、穏やかな年の瀬となると良いですね。今年も、一年間ありがとうございました。

ロビンドロナト・タゴール

写真を見ると、詩人というよりは聖人を思い浮かべてしまいます。インドのコルカタ(カルカッタ)生まれの詩人です。1913年にノーベル文学賞を受賞しています。アマルティア・セン博士の、アマルティアはタゴールが名づけたものですが、インド国歌とバングラディシュ国家を作詞した詩人でもあります。二つの国の国家を作詞したのは恐らく彼だけでしょう。

彼の書いた詩は、自然な美しい詩で、タゴールにとっては詩を書くことは何の苦もなかったのではないかと思わせるくらい、全く作為が感じられません。最近、『ギタンジャリ』と『迷い鳥』を買って読んでいます。

戦前ですが日本にも滞在されたことがあるようで、『迷い鳥』という詩集は、非常に短い詩が多いのですが、俳句をイメージして作られたものようです。横浜に三か月ぐらい滞在したということで、今のよう、飛行機であっという間に移動できると、なかなか三か月も滞在してもらえないのですが、当時は海外は船旅で、ずっとのんびりしていますね。

我々にとって詩は目で読むものですが、彼にとっては歌うものであったようです。歌われた詩が動画でもあるのかは不明ですが、インド国歌やバングラディシュ国家は、オンライン動画で聞くことができます。他の国の国歌とは大分違うものです。普通、国家はスポーツの国際試合の前に歌われ、戦闘モードに入るための「しきたり」のように思いますし、ラグビー・ワールドカップでも、屈強なラグビー・マンが国歌を歌って涙していたのですが、タゴールの書いた国家は、心が和むような不思議なものです。

しかし何と言っても、『ギタンジャリ』という詩集が素晴らしいものです。人生を扱ったものも多いのですが、タゴールのあまり素直な書き方に触れると、一見、暗い話題も人間が受け入れるべき自然なものに感じられます。

是非、一度読んでいただければと思います。



二年前と変わらぬ、クリスタル・ツリー

2017年の12月にファイザーヘルスリサーチ振興財団の研究助成の授賞式が東京であり、その際に紀尾井町ガーデンテラスの前にあるクリスタルのツリーの美しさにしばし見とれたのですが、今年も同じように飾られていました。

今年は、帰り道でも見ることができ、ライトアップされた姿も楽しむことができました。毎年、異なる趣向というのも楽しみですが、季節限定で変わらず見ることができるというのも、思い出となると感じました。



ゴッホ展

せっかく東京に出掛けたので、上野の森美術館で開催されているゴッホ展を見てきました。有名な絵は、画集でもオンラインでも見ることができますが、やはり、本物の質感は別格に思います。特にゴッホは、絵の具の厚さが尋常じゃないので、実際に見ると、その凹凸で微妙に光の反射がありますね。これは、とても画像では経験できないものに思います。右の絵も、画像では良さがうまく伝わりませんが、実物はずっとキラキラした、陽光の感じがあるのです。緑も濃いように思います。

東京には、他にも国立西洋美術館、国立新美術館をはじめ、多数の美術館、博物館が集まっており、海外にいかなくても、素晴らしい作品と出会える恵まれた都市だと思います。



MEMO

12月のがん化学療法科の予定

12月3日	診療応援(平出先生)
12月10日	診療応援(工藤先生)
12月17日	診療応援(平出先生)
12月20日	休診
12月24日	診療応援(工藤先生)
12月30日	診療日

